大学生の海外ボランティア

吉田桂子[a], 北田大介[b]
[a] 甲南大学 全学共通教育センター
神戸市東灘区岡本8-9-1, 658-8501
[b] ETS Japan 合同会社 国際教育推進部
京都市左京区粟田口鳥居町2-1 京都市国際交流会館3F, 606-8436

要 旨

本稿では、「KONANグローバル・バリアフリープロジェクト」の一環として新設された「海外ボランティア」（キャリア創生共通科目）の概要について説明し、新設後の学生の「海外ボランティア」科目の履修・学習状況について調査する。今後の「海外ボランティア」科目や新カリキュラムの発展の可能性を探るため、別科目「国際理解C」を履修中の学生を対象に、「ボランティア活動についての調査」を行い、学生のボランティア経験と、今後のボランティア活動参加の意思、活動選択における優先事項、海外ボランティア参加による単位取得希望の有無などについて調査した。

キーワード: 海外ボランティア, 大学生, カリキュラム, 意識調査

1 はじめに

アジア経済研究所の国際人口移動に関する調査研究（山形, 2006）によると、現在のアフリカで誕生したと言われる人間は、人口移動の長い歴史とともに歩んでいる。移動の目的は、食糧の探求、戦争、交易など多岐にわたり、各時代における潮流を反映していると言える。16 世紀以降は冒険家の大陸間移動、18 世紀は奴隷貿易によるアフリカの人々の強制移動、19 世紀は中国やインドの人々の経済の要所への移動、20 世紀は迫害を恐れた難民の移動などが例として挙げられている。一方で、20 世紀後半は、交通手段の発達、渡航期間を契約で定めた海外出稼ぎの普及などにより、自発的に移動する人口が増加したとされている。

さらに 20 世紀後半からは、二度の世界大戦を経験した後、人々が国際協力の重要性を認識し、国境を超えて自発的に活動すること、すなわち海外ボランティア活動についても活発に行うようになり、現代における人口移動の重要な特徴の一つになっているとも言えるであろう。

United Nations Information Centre (2020)も、2020 年 1 月より、SDGs 達成に向けて「行動の 10 年（Decade of Action)」をスタートさせ、「貧困やジェンダーから気候変動、不平等、資金不足の解消にいたるまで、世界の最重要課題すべてについて持続可能な解決策を加速度的に

講じることを求めている」と発表している。「行動（Action）」という言葉が響く。

本稿では、こういった背景もふまえて、海外ボランティアへの本学学生の参加を促進・支援する目的で創られた「海外ボランティア」科目の概要について説明する。次に、本学や他大学の学生がどのような海外ボランティア活動に参加しているか、「海外ボランティア」科目においては、どのような学びを得ているかについて調査する。最後に、学生が海外ボランティアに対してどのような意識を持っているか調査し、今後の科目の発展について考える。

2　「海外ボランティア」科目の新設と現状

2.1 「海外ボランティア」科目新設にむけて

2.1.1　「KONAN グローバル・バリアフリープロジェクト」

本学では、2016 年度、当時国際言語文化センター所属であった津田信男教授がリーダーとなり、「KONAN プレミア・プロジェクト」の一つである「KONAN グローバル・バリアフリープロジェクト」が発足した。その一環として、「学生個人の善意による無償の社会奉仕活動として、さまざまな場面で人々の役に立つ活動を行い、いろいろな人々との交流や地域へ貢献できるボランティア活動を実施する」という目的において「海外ボランティア」科目の新設を提案し、実現に向けて動き出した。本稿著者の北田は本学の提携機関所属担当者として、同じく本稿著者の吉田は国際言語文化センター所属のプロジェクトチームメンバーとして、科目新設に関わった。

2.1.2　提携機関の検討

はじめにどのような機関が開発・運営しているプログラムに学生を派遣するか検討し、米国の非営利教育団体「Council on International Education and Exchange（CIEE）」の日本代表部である「一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会（通称 CIEE Japan）」のプログラムが検討対象となった。ここから「CIEE」、「CIEE Japan」と、のちに登場する NPO 法人「ICYE ジャパン」、「NICE」といった団体について簡単に紹介する。

2.1.2.1「CIEE」

まず「CIEE」について見てみる。「CIEE」のウェブサイトによると、第二次世界大戦直後、世界各地で人々の平和的な共存と尊重を目指し、学生や教員を対象とした国際交流プログラムが開始される中、1947 年に米国でもそういったプログラムをコーディネートする専門家に対するニーズが高まり、そのニーズに応える目的で「Council on Student Travel（CST）」が設立された。「CST」は、当初は、主に米国学生のヨーロッパへの渡航と、世界の学生の米国への渡航を支援していたが、次第に国際文化教育へと方針を転換したため、1967 年に「CIEE」と名称を変更した。同ウェブサイトには、以下のように理念と現状が示されている。

For 70 years, we've had a single mission

To help people gain understanding, acquire knowledge, and develop skills for living in a globally interdependent and culturally diverse world by bringing the world together through the most meaningful exchange programs available.

70 年、一つの使命

世界はお互いに依存している一方で、文化的には多種多様に異なっています。その中で生きてゆくすべとして、国際理解を深め、知識を蓄え、スキル・能力を向上させる手助けをしています。

2.1.2.2「CIEE Japan」

次に「CIEE Japan」について見ていく（こちらはすでに団体がなくなり、ウェブサイトが閉鎖されているため、Wikipedia を参照する）。東京オリンピック翌年の 1965 年に、上記「CIEE」の日本代表部 が設立され、2018 年 9 月から「一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会（通称 CIEE Japan）」となった。本稿筆者の北田は、本学の「海外ボランティア」科目の準備・始動当時、こちらの「CIEE Japan」に所属しており、当科目の教育を多方面から支える役割を担った。

「CIEE Japan」は、これまでに主に 2 つの事業を行ってきた。1 つ目の事業は、米国「CIEE」同様、国際教育・国際交流プログラムの開発・運営である。1965 年に 20 代の若者を夏期に米国の大学に派遣して以来、これまでに運営した国際交流プログラムには、約 6 万 5 千人が参加した。具体的には、大学生対象の短期国際交流・ボランティア体験プログラムの開発・運営、教育機関の委託を受けたプログラム企画・運営、政府の委託を受けた国際交流研究・調査、教員対象の研修などを行った。

「CIEE Japan」の 2 つ目の事業は、米国の「Educational Testing Service (ETS)」が開発した英語試験「Test of English as a Foreign Language (TOEFL®)」と、関連する英語教育プログラムを、「ETS」の日本事務局として実施することである。

ところが、「CIEE Japan」の 1 つ目の主要事業であった、大学生対象の短期国際交流・ボランティア体験プログラムは、コロナ禍の影響によりしばらく参加者募集停止が続き、最終的には 2021 年に終了することとなった。本学「海外ボランティア」科目においても、コロナ禍の 2020 年度からの 3 年間は、「CIEE Japan」のプログラムの参加者募集停止と、本学の海外渡航方針により、派遣を停止していた。2021 年度に入り、「CIEE Japan」の国際教育・国際交流プログラム事業の終了を受けて、急遽、別団体の派遣プログラムを探すこととなった。いくつかの団体とオンラインで面談を行い、「CIEE Japan」の国際教育・国際交流プログラムを引き継いだ NPO 法人「ICYE ジャパン」とも提携し、2022 年度春（2023 年 2～3 月）のプログラムより、派遣を再開できる運びとなった。

ちなみに、「CIEE Japan」の 2 つ目の主要事業であった、「TOEFL®」と英語教育プログラムについては、2021 年に設立された「ETS Japan 合同会社」が引き継いでいる。「ETS Japan 合同会社」が提供するオンライン・ライティング学習システム「Criterion®」は、本学の「留学のための英語集中プログラム」の「中級英語 Writing」などの科目で導入されている。本稿筆者の北田は、現在この「ETS Japan 合同会社」に所属している。

2.1.2.3「ICYE 連盟」と NPO 法人「ICYE ジャパン」、そして「NICE」

「ICYE ジャパン」のウェブサイトによると、1949 年第二次世界大戦後に敵国同士であったアメリカとドイツの間で「International Christian Youth Exchange（ICYE 連盟）」が発足した。二国間で友好関係、平和の再構築を目指して国際文化交流が開始されたことがきっかけであったとされる。その後 1958 年に「ICYE ジャパン」が誕生した。「ICYE 連盟」は、「UNESCO（国際教育科学文化機関）」、「UNECOSOC（国連経済社会理事会）」、「WCC（世界教会協議会）」、「CCIVS（国際ボランティアサービス調整委員会）」といった組織に参加しており、1987 年に国連総会が、「ICYE 連盟」を「Peace Messenger（平和の使者）」に任命している。2002 年に「ICYE 連盟」が「International Cultural Youth Exchange」と名称を変更し、特定非営利活動法人(NPO 法人)となった。2021 年に「Education Planning Inc. USA」とパートナーシップを組み「短期サンフランシスコプログラム」を開始、2022 年には「The Alliance of European Voluntary Service Organizations」に加盟し、「短期国際ワークキャンププログラム」を開始した。同ウェブサイトには、ミッション、ビジョン、ゴールが以下のように示されている。

> ***ミッション：****異文化習得経験の場を提供し、青少年の社会性と自主性を高めることに努めます。*
> ***ビジョン：****異文化との摩擦や葛藤を経て、平和への目を開くことです。*
> ***ゴール：****異文化と人々の間に存在する障壁の打破、国際的な異文化理解を深める場の提供を実現、文化、民族、男女間の平等、国際的な異文化理解を深める場の提供を目指します。*

現在ではドイツ・ベルリンに本部を置き、40 カ国に支部・パートナーを持つ国際的な独自の NPO となり、宗教・民族・言語・国籍・性別などの違いを超え、年間 500 名から 600 名の青年を各国間で派遣・招聘していると説明している。

これ以外にも、本学では、1990 年に設立し、現在国内と約 90 カ国でワークキャンプ事業を展開し、特にアジアの協力網である NVDA（アジア・ボランティア発展ネットワーク）でも代表を務める特定非営利活動法人「NICE（日本国際ワークキャンプセンター）」ともオンライン・ミーティングを行っている。

2.1.3　派遣先海外ボランティアプログラムの検討

2016 年度に提携団体として「CIEE Japan」が選定されてから、派遣先プログラムについても検討を行った。2017 年度実施予定であったプログラムは以下のとおりであった。以下に各プロジェクトの概要を説明する。

表 1 「CIEE Japan」 の海外ボランティア （2017 年度）

IVP	国際ボランティアプロジェクト
ASIA(VNM)	ベトナム「児童福祉」
ASIA(IDN)	インドネシア「日本語クラスサポート」
EVP	オーストラリア／ニュージーランド「環境保護」
OCE	オーストラリア／ニュージーランド「チャイルドケア」
CAN	カナダ「環境保護」「アニマルケア」「地域サポート」
TA	アメリカ「教師アシスタント」
USA	アメリカ・ボランティア「チャイルドケア」「シニア福祉」「NPO活動支援」
TWN	4DAYSワークキャンプ in 台湾

2.1.3.1「国際ボランティアプロジェクト」

ヨーロッパ諸国での活動を中心とした 2～3 週間のプロジェクトで、現地に自分で飛び込み、多国籍のボランティアと協働するプロジェクトである。

『CIEE 海外ボランティア報告書　2018 年 4 月～2019 年 3 月』によると、「国際ボランティアプロジェクト」の歴史は古く、第一次世界大戦後にヨーロッパで敵対し合った国々の若者が国境を越えて共同生活をしながら、荒廃した地域や町の復興をおこなったことが起源である。1982 年に西欧のボランティア団体を中心に The Alliance of European Voluntary Service Organizations（「Alliance」）が発足し、「CIEE Japan」は 1995 年に加入している。毎年 3 月に開催される「Alliance」の Technical Meeting に「CIEE Japan」も参加し、派遣可能な海外プロジェクトの情報を取得し、安全面と活動内容を精査して最終的な派遣プロジェクトを決定している。例えば 2018 年度であれば、世界 35 カ国で 860 を超えるプロジェクトが開催され、「CIEE Japan」からは、439 名が参加した。

このプロジェクトはワークキャンプ型で、春(1～3 月)・夏(7～9 月)に開催される。活動内容は建物の修復や建設、社会福祉、環境保護、文化交流などさまざまである。参加者は指定された集合場所でリーダーと 10 名程度の多国籍のメンバーに 1 人で合流し、共同生活をしながらボランティアを行う。

現在は、この「CIEE Japan」の「国際ボランティアプロジェクト」を、「ICYE ジャパン」の「短期 国際ワークキャンプ」（1～2 週間）に置き換えて案内している。例えば、大学生が参加できる 2022 年度春プログラムは、アイスランド、メキシコ、カンボジアであった。

2.1.3.2 ベトナム・インドネシア・オーストラリア・カナダ・アメリカプロジェクト

アジア・太平洋地域で活動を行う 2～4 週間のプロジェクトである。現地 NGO/NPO スタッフのオリエンテーション、サポートなどを受けながら、紹介された機関で活動をするプログラムである。このうち、いくつかについて概要を説明する。

ベトナム・インドネシアのプロジェクトは、「CIEE Japan」のボランティア経験者から、「アジアでボランティア活動をしたい」という要望に応え、「Alliance」に加盟し、すでに「国際ボランティアプロジェクト」で CIEE からのボランティア派遣実績のある現地受入団体と提携し、

2009 年に追加された。

アメリカ「教師アシスタント」プロジェクトは、「日本以外の教育現場体験」をしたいという要望に応え、2010 年以降は教職資格や教育関係のバックグラウンドのない人でも参加可能なプロジェクトとして提供されている。

アメリカ「NPO 活動支援」プロジェクトは、貧富の差の大きいサンフランシスコにおける低所得者層を支援する活動で、常時ボランティアが必要となっている。

現在は、これらの「CIEE Japan」のアジア・太平洋地域プロジェクトを、「ICYE ジャパン」の「短期 アジアプログラム」(2～4 週間）に置き換えて案内している。例えば、2022 年度春プログラムは、ベトナムとインドネシアであった。

2.1.4　現地プロジェクト視察（ベトナム「児童福祉」プロジェクト）

派遣先プロジェクトの活動環境・内容の詳細を知るため、2016 年 8 月 22 日～8 月 25 日、「CIEE Japan」（当時所属）の北田、現地「Volunteers for Peace Vietnam（VPV)」ディレクターの Cuong さん、連絡担当の Hang さん、現地「VPV」スタッフ Kai さん、Minh Hai さん、Alison さんの協力を得て、科目新設のチームから吉田がベトナム・ホーチミン市の「VPV」への視察を行った。以下に視察報告書より、活動環境と内容をまとめる。

＜活動環境＞

1 日目、日本とドイツの参加学生と共に、空港で「VPV」の現地スタッフ 2 名に出迎えられ、「VPV」のオフィス兼ボランティア参加者の宿泊施設である「Peace House」にタクシーで移動。所在地はホーチミン市中心街から車で 20 分ほどの 7 区の静かな住宅地で、6 階建ての 1 階にオフィスと会議スペース、お手洗いとシャワー、2 階に共同キッチン、ダイニング、リビング、3 階～6 階にベッドルームがあり、屋上はベランダとなっている。各ベッドルームに 2 段ベッドが 5 つほどあり、シャワールームがある。各階に男女一つずつベッドルームがあり、全体で 45 名が共同生活できるようになっていた。食事は予約制。冷蔵庫も使用可能。近所に洗濯サービスがある。

プロジェクトは毎週月曜日開始で参加者は各自最低 2 週間で期間を決めるが、この週は 13 名の参加者がいた。「VPV」 エグゼクティブ・ディレクターNguyen Doan Cuong さんと面会し、「VPV」は現在 50 の国際機関と提携しており、「CIEE」とは 2006 年に提携を開始し、現在 30 カ国からのボランティア参加者を受け入れており、チャイルド・ケア、教育、福祉、医療が主な活動内容であると説明を受けた。1 日目のオリエンテーションで適性に応じて活動先が割り当てられ、基本的には活動期間中は日々同じ場所で活動する。負傷疾病の場合は、車で 10 分以内にある国際病院を紹介しているとのことであった。

＜活動内容＞

2日目、朝から日本人10名、オーストラリア人１名、フランス人１名、ドイツ人１名と現地スタッフ４名で英語によるオリエンテーションが始まった。「VPV行動規範」と「チャイルド・ケアのガイドライン」という同意書に署名、ディレクター挨拶、スタッフと参加者の自己紹介、「Peace House」内規則、プロジェクト内容、ベトナム文化の説明がなされた。

午後は、重度の身体・精神的な障がいをもつ子供、孤児となった子供、貧困家庭より預けられた子供をケアする施設「ク・クアン・パゴダハウス・オブ・パゴダ」の視察を行った。この活動に初めて参加した大学生は、最初は戸惑っているようにも見えたが、数十分もすると、少しずつ子供たちとの距離を縮め、自らできることを自分なりに考えて食事の補助などもすすんで行っていた。１週間前からこの施設で活動している「VPV」のボランティア参加者（日本人大学生）が、今日から活動を始める参加者（日本人大学生）に、前週の経験を説明していた。

また、この施設担当の現地「VPV」スタッフは、大学で社会福祉を専攻していたため、障がいをもつ子供への接し方や関連する社会問題についての知識をもっていた。若者に対する避妊薬についての教育の必要性、婚姻外の妊娠や障がいをもつ子供に対する社会的差別について視察者（吉田）に話してくれた。ボランティア参加者がプログラムを淡々と行うだけでなく、本当にその体験から多くを考え学び取るには、そのような複雑な事情を英語で現地の人々に質問したり理解したりする能力や、少なくとも事前に日本語でも英語でもある程度の知識を得ておくことが望ましいと思った。プロジェクトに参加する学生が単に履歴書に一行加えることにとどまらず、様々な問題を深く考えられるようになり、「VPV」の信念にもあるように、今後自分や他の人の人生に良い影響を及ぼす決断ができるようになるか、事前事後の学習の重要性を感じた。

3 日目、朝から自閉症など知的障がいを持つ児童が学ぶ「ギア・ディン特別支援学校」を視察し、Vo Thi Khoai 校長と面会した。78 名の児童がクラスに分かれ、読み書き、算数、英語などを学んでいる。障がいの程度にもよるが、早期に様々な適切な訓練・教育を行えば、通常の小学校に適応できるようになる場合もあるという方針があり、「early intervention」と呼び、実践している。通常学校に移っていく児童がいる一方、通常学校から移ってきた児童がいた。教職を目指す日本の大学生は、将来的にそのような状況に直面することも考えられるので、日本の特別支援学校に加え、このような他国の特別支援学校のプロジェクトに参加し、多様な方針・訓練・教育方法を学ぶことは意味があるだろう。

＜視察を終えて＞

視察にあたり、「CIEE Japan」からのリクエストを受け、参加者にたくさんのことを聞くことは控えたが、オリエンテーションなどを見学して、ボランティア参加者である日本人大学生の専攻分野が広く、理系の学生もかなりいることに驚いた。本学においても、人文科学、社会科学系のみならず、自然科学系分野の学生が多様なプログラムから自分に合ったものを選んで参加し、日本の他大学や他国の大学生との横のネットワークも広げながら学び、その成果を学内外で生かして欲しいと思った。

また「VPV」の現地スタッフは非常に丁寧にボランティア参加者のケアをしながら、できるだけ参加者の自立性も向上させ、参加者間で協働することを促進していた。他国の大学生もいるので、かなり話される英語もはやく高度であるが、自己紹介のときなどは、日本人大学生の英語力を配慮して、英語を使いやすくするように導いていたのも印象的であった。

このようなプログラムを通して、学生が同世代の多国籍・多分野の学生と協働しながら、様々な境遇の人々、とくに社会的弱者と呼ばれる人々に直接ふれることで、少しずつ自分にできることを見つけ、プログラム期間中もまたその後の人生においても、たくましく思いやりのある人として成長していくようになればとの願いが強まった。

2.1.5　カリキュラムにおける「海外ボランティアⅠ・Ⅱ」

提携団体と派遣先プログラムの検討、現地視察を経て、2017 年度、本学国際言語文化センター（2022 年度全学共通教育センターに統合）が単位認定を行う、全学共通教育センターの「キャリア創生共通科目」として、「海外ボランティアⅠ・Ⅱ」が新設された。

全学共通教育センターには、「社会で活躍するフィールドを広げる、すなわちキャリアの広がりを創り出していくことを目的とした、大学と社会を繋ぐ科目」として、「キャリア創生共通科目」が開設されている。「キャリア創生共通科目」は、以下の 3 つの目的と 7 つの科目群により構成されている。その中で、「活躍する世界を広げる」目的をもつ「国際系」、「ボランティア・地域連携系」の両方の特性を有する科目として「海外ボランティアⅠ・Ⅱ」が開設され、分類としては「国際系」に属す科目となった。

表 2 甲南大学 全学共通教育センター「キャリア創生共通科目」の目的と科目群（2023 年度）

目的	科目群
生涯を通じた就業力を培う	キャリアデザイン系
働くための力を磨く	ビジネス系、政策・法務系、情報系
活躍する世界を広げる	国際系、ボランティア・地域連携系、福祉・スポーツ健康科学系

「海外ボランティアⅠ」は 4 単位科目、「海外ボランティアⅡ」は 2 単位科目である。現地活動時間については、開設当初は、「「海外ボランティアⅠ」は 4 週間以上、「海外ボランティアⅡ」は 2 週間以上の海外短期ボランティアプログラムに参加することとされていた。現在は、より活動時間が明確化され、「「海外ボランティアⅠ」は 120 時間以上、「海外ボランティアⅡ」は 60 時間以上の海外短期ボランティアプログラムに参加することに変更されている。

履修登録は、プログラムへ参加した直後の履修登録期間のみ登録でき、夏期休暇中に参加の場合は当年度後期末、春期休暇中に参加の場合は翌年度前期末に単位認定される。本学では、学部ごとに一つの学期内に取得できる単位に制限があるが、この「海外ボランティア」科目は、休暇中の活動がメインとなるため、単位制限外である。

履修者が行うこととして以下の事柄がある。渡航前は、学内説明会と「CIEE Japan」（2022 年度春からは「ICYE ジャパン」）のオリエンテーションへの参加、「海外ボランティア参加届」

の全学教育推進機構事務室への提出。渡航中は、活動日報の作成。渡航後は、履修登録申請と、日報、学外主催機関発行の参加証明書、実習成果報告レポートの提出、報告会での体験談プレゼンテーションである。

成績評価は、①日報（活動時間と内容、反省・感想等を簡単に記入する）、②レポート（ボランティアの活動内容とボランティアの活動からの発展を含む）③報告会（他の海外ボランティア参加学生、教職員参加）における体験談プレゼンテーション、により総合的に判断される。

2.2 「海外ボランティア」科目の状況

2.2.1 「CIEE Japan」 の海外ボランティア参加者数

実際にどのぐらいの学生が「CIEE Japan」の海外ボランティアに参加していたのか調査した。2020 年度から 2022 年度までは、コロナ禍でプログラム自体がボランティアの受け入れを中止しており、本学も安全面を考慮して派遣を中止していたため、科目開設の 2017 年度から 2019 年度までの 3 年間の参加者を見てみる。表 3 の「CIEE Japan」の本学への報告によると、毎年平均 18 名が参加しており、夏の参加者の方が多くなっている。

表 3 甲南大学の CIEE ボランティア参加者数（2017 年度～2019 年度）

年度	時期	人数
2017 年度	夏	14
2017 年度	春	3
2018 年度	夏	15
2018 年度	春	4
2019 年度	夏	13
2019 年度	春	5
計		54

表 4 学部別参加者数（2017 年度～2019 年度）

学部	人数
文	14
法	4
経済	7
経営	7
理工	4
知能情報	1
マネジメント創造	16
フロンティアサイエンス	1
計	54

では、参加者総数 54 名に関して、学部別の参加者数はどのようになっているだろうか。表 4 のような内訳になっている。文系学部で参加者数がより多くなっている。現地視察を行ったベトナム「児童福祉」プロジェクトでは、他大学から理系学部の学生が多く参加していることに驚いたが、本学では、理系学生が参加者全体の 11%となっている。しかし 0 ではないため、理系学生が参加できないという訳ではないこともわかる。休暇期間をうまく活用して、海外ボランティアを経験し、「海外ボランティア」科目の単位履修もできたらよいのではないかと考える。

では、毎年平均 18 名という本学の参加者数は多いのだろうか、それとも少ないのだろうか。他校と比較してみよう。表 5 は、2017 年度の CIEE ボランティアの大学別参加者数を示しており、参加者総数が 10 名以上の大学がリストされている。表 5 でも表 3 と同様に 2017 年度の

本学学生の参加者数は 17 名と示されており、このリストでは全国で 14 番目に参加者が多く、関西圏では関西外国語大学に次いで 2 番目に多い大学となっている。

表 5 CIEE ボランティア 大学別参加者数（2017 年度）

2017年度（2017年4月～2018年3月）
大学別参加者数
＊参加者数総計が10名以上の大学

大学名	学内説明会	CIEEメンバー校	単位認定	参加者数									
				IVP	ASIA（VNM）	ASIA（IDN）	EVP	OCE	CAN	TA	USA	TWN	総計
関西外国語大学	○	○	○	72	7	6	35	21	14	3	1	7	166
明治大学	○	○	○	27	3	13	12	7	4	5	8	2	81
名古屋商科大学	○	○	○	77	0	0	0	0	0	0	0	0	77
中央大学	○	○	○	11	7	3	3	3	6	0	1	0	34
津田塾大学	○	○	○	11	4	3	2	4	6	1	0	0	31
青山学院大学	○	○	○	8	1	0	2	4	11	2	2	0	30
神田外語大学	○	○	○	10	0	1	12	0	2	2	2	0	29
創価大学	○	○	○	9	5	0	7	2	1	1	2	1	28
駒澤大学	○	○		4	6	2	2	6	2	1	2	1	26
横浜市立大学	○	○	○	11	2	3	1	4	4	0	0	0	25
獨協大学	○	○		5	6	1	6	2	3	0	1	1	25
日本大学	○	○		8	2	4	6	0	2	1	0	0	23
慶應義塾大学	○			12	1	0	4	0	2	1	1	1	22
甲南大学	○		○	6	3	1	0	5	1	0	1	0	17
信州大学	○	○		5	0	2	6	0	3	0	0	0	16
大妻女子大学	○		○	0	0	0	0	13	1	2	0	0	16
上智大学	○	○		7	1	1	2	2	0	0	0	2	15
早稲田大学	○			7	1	0	5	0	0	2	0	0	15
大東文化大学	○	○		8	3	0	3	0	1	0	0	0	15
芝浦工業大学	○			2	0	1	9	0	0	0	0	2	14
法政大学	○	○		1	2	1	4	2	1	0	2	1	14
立正大学	○	○		0	0	2	2	5	1	0	4	0	14
神戸大学	○		○	8	0	1	0	2	1	1	0	0	13
南山大学	○	○		3	1	0	1	4	2	1	0	1	13
立命館アジア太平洋大学	○	○		4	0	0	1	0	2	1	0	5	13
千葉工業大学	○			3	0	1	6	0	0	0	1	1	12
筑波大学	○	○		7	0	0	2	0	2	0	1	0	12
麗澤大学	○	○	○	3	1	1	2	2	2	0	1	0	12
九州大学	○	○		3	2	0	1	0	1	1	0	2	10

IVP	国際ボランティアプロジェクト
ASIA(VNM)	ベトナム「児童福祉」
ASIA(IDN)	インドネシア「日本語クラスサポート」
EVP	オーストラリア／ニュージーランド「環境保護」
OCE	オーストラリア／ニュージーランド「チャイルドケア」
CAN	カナダ「環境保護」「アニマルケア」「地域サポート」
TA	アメリカ「教師アシスタント」
USA	アメリカ・ボランティア「チャイルドケア」「シニア福祉」「NPO活動支援」
TWN	4DAYSワークキャンプ in 台湾

本学学生は、どこの国でどのような内容の活動に参加しているのだろうか。表 6 によると、個人でより自立して飛び込んでいく国際ボランティアプロジェクトを選択する参加者が 21 名、現地 NGO/NPO スタッフのオリエンテーションやサポートを受けられるアジア・太平洋地域のプロジェクト参加者が 33 名であった。よりハードルが高い前者の参加者も多いことが驚きである。学生のプロジェクト選択の理由について知りたくなった。前者と後者のプロジェクトの違いの一つとして、前者の参加費が安いということが挙げられる。かつて北田がさまざまな大学の学生にプログラム紹介を行っていた頃、学生からの質問や相談の多くが参加料金体系やコストパフォーマンスに関するものであった。家族からの援助を受けるケースもあるが、学生がアルバイトで得たお金を使って参加する難しさがあり、その側面から見ても、当時参加費が最も安かった前者のプロジェクトの支持が高くなっていたものと考える。参加費の詳細ついては、後の 2.2.4 海外ボランティアプログラム・メンバー校制度と奨学金によるサポートのセクションでより詳しく述べる。

表 6 甲南大学 CIEE ボランティア 活動別参加者数 （2017 年度～2019 年度）

種別	プロジェクト	国	人数
IVP	国際ボランティアプロジェクト	アイスランド	8
	国際ボランティアプロジェクト	イタリア	1
	国際ボランティアプロジェクト	エストニア	1
	国際ボランティアプロジェクト	オランダ	1
	国際ボランティアプロジェクト	カンボジア	1
	国際ボランティアプロジェクト	スペイン	3
	国際ボランティアプロジェクト	セビリア	1
	国際ボランティアプロジェクト	デンマーク	1
	国際ボランティアプロジェクト	ドイツ	2
	国際ボランティアプロジェクト	フランス	2
ASIA(VNM)	ベトナム「児童福祉」	ベトナム	8
ASIA(IDN)	インドネシア「日本語クラスサポート」	インドネシア	2
EVP	オーストラリア「環境保護」	オーストラリア	4
	ニュージーランド「環境保護」	ニュージーランド	3
OCE	オーストラリア「チャイルドケア」	オーストラリア	5
	ニュージーランド「チャイルドケア」	ニュージーランド	2
CAN	カナダ「環境保護」	カナダ	1
	カナダ「アニマルケア」	カナダ	1
	カナダ「地域サポート」	カナダ	2
TA	アメリカ「教師アシスタント」	アメリカ	0
USA	アメリカ・ボランティア「チャイルドケア」	アメリカ	0
	アメリカ・ボランティア「シニア福祉」	アメリカ	0
	アメリカ・ボランティア「NPO 活動支援」	アメリカ	2
TWA	4DAYS ワークキャンプ in 台湾	台湾	3
計			54

本学の海外渡航方針により、2020 年度から 2022 年度夏プログラムまで派遣を中止していたが、2022 年度春プログラム(2023 年 2～3 月実施)より、上記のプログラムを引き継いだ「ICYE ジャパン」と提携し、派遣を再開することができた。「ICYE ジャパン」からの報告によると、2022 年度春は、インドネシア「日本語クラスサポート」プロジェクトに 3 名、2023 年度夏は、アメリカ・ボランティア「NPO 活動支援」プロジェクトに 4 名、ベトナム「児童福祉」プロジェクトに 1 名が参加した。このように、2022 年度、2023 年度は参加者が減少しているが、全学的に徐々に様々な海外渡航プログラムへの参加が増えてきているので、「海外ボランティア」への参加を促進していきたい。2017 年度～2019 年度は、「CIEE Japan」が京都にもベースがあることから、学内説明会を本学「Global Zone」で対面で行っていた。2022 年度以降は、「ICYE ジャパン」が東京ベースであることから、オンラインで説明会を行なっている。対面の説明会の実施が必要か、検討する必要がある。

2.2.2 「海外ボランティア」科目の単位認定者数

表 5 に戻り、単位認定について考える。2017 年度の時点で、参加者数が 20 名以上と多い大学でも、そのすべてにおいて単位認定を行なっているわけではないことがわかる。単位認定を行なっているのは、リストの 29 校中 13 校でおよそ半数である。

本学においては、表 5 の参加者 17 名のうち、全員が「海外ボランティア」科目を履修し、課題を行い、単位を取得するわけではない。もともと本学には「海外ボランティア」科目開設以前より、単位取得を目的とはせず、「CIEE Japan」の海外ボランティアプログラムに参加する学生がいた。今回「海外ボランティア」科目が新設されたことにより、注目すべきは、「海外ボランティア」科目の履修登録の手続きと課題を行い、最終的に単位を取得した学生の数である。

表 7 の 2017 年度から 2019 年度までの「海外ボランティア」科目の単位認定者数を見てみよう。表 3・4 で見たように、2017 年度から 2019 年度までに「CIEE Japan」の海外ボランティアプログラムに参加したのは、計 54 名であったが、表 7 が示すように、2017 年度から 2019 年度までに「海外ボランティア」科目の履修登録と課題を行い、単位取得したのは、「CIEE Japan」ボランティア 6 名と「NICE」 ボランティア 2 名の計 8 名であった。1 名を除き 7 名が、2 週間以上の海外短期ボランティアプログラムに参加し、「海外ボランティア II」に履修登録して、2 単位を取得していることがわかる。

また表 7 にはないが、単位を取得した学生を学部別に見ると、文学部 4 名、経営学部 3 名、経済学部 1 名であった。また履修登録、課題、単位取得をした学生は、みな夏プログラムに参加しており、春プログラムの参加学生がいないこともわかった。プログラム期間や課題遂行に必要な時間の確保など、どのような理由があるのか、今後調査してみたい。

表 7 「海外ボランティア」科目 単位認定者 （2017 年度～2019 年度）

科目名	単位数	参加時期	参加プログラム	参加国	主催	単位申請時期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2017 年夏	オーストラリア「チャイルドケア」	オーストラリア	CIEE	2017 年度後期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2017 年夏	アメリカ「NPO 活動支援」	アメリカ	CIEE	2017 年度後期
海外ボランティアⅠ	4 単位	2017 年夏	NZ「チャイルドケア」	ニュージーランド	CIEE	2018 年度前期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2018 年夏	ベトナム「児童福祉」	ベトナム	CIEE	2018 年度後期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2018 年夏	ベトナム「児童福祉」	ベトナム	CIEE	2018 年度後期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2018 年夏	国際ボランティアプロジェクト	ドイツ	CIEE	2018 年度後期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2019 年夏	国際ワークキャンプ Peace Village 2	タイ	NICE	2019 年度後期
海外ボランティアⅡ	2 単位	2019 年夏	国際ワークキャンプ Peace Village 2	タイ	NICE	2019 年度後期

さらに、表 6 にあるように、54 名中 21 名が、現地 NGO/NPO のサポートをそれほど受けずに自立して活動する CIEE 国際ボランティアプロジェクトに参加しており、大学のサポートや単位認定制度からは独立して活動することを好む傾向があるのではないかと思われる。

2.2.3　「海外ボランティア」科目の単位認定者が得た学び

では、「海外ボランティア」科目の単位を取得した学生はどのような学びを得たのだろうか。日報、レポート、報告会プレゼンテーションにおける学生の振り返りから、大きく以下の 4 つの学びがあったことがわかった。

① 時間、休暇、住、食などに関する異文化の価値観と、多様な価値観への適応
② 孤児の背景と環境、NGO/NPO の過酷な現状、善意への依存、といった社会問題
③ 自己の長所、語学力、情緒変化などの自己分析と、自分を取り巻く環境の特徴
④ 他のボランティアメンバーとのコミュニケーション、現地ボランティアスタッフの活動、配慮、サポートの発見、知識の共有など、他者との関わり方

また、「海外ボランティア」科目の報告会後も、引き続き Zoom とメールで、科目担当教員（吉田）と相談しながら学びをまとめて英文エッセイを作成し、英国の大学院に進学した学生も出てきた。

2.2.4　海外ボランティアプログラム・メンバー校制度と奨学金によるサポート

最後に費用について触れる。一般の参加者の費用は、例えば 2022 年度春の「ICYE ジャパン」の「短期 国際ワークキャンプ」（1～2 週間）は 6 万円で、「短期 アジアプログラム」（2～4 週間）は 3 週間で１８万 5 千円である。表 5 にある CIEE メンバー校というのは、大学が「CIEE Japan」に年会費を支払いメンバー校となることで、在学生のプログラム参加費が割引かれる制度で、本学は、今後コロナ後の参加者数の推移を見ながら、現在提携している「ICYE ジャパン」のメンバー校制度への加入を検討していく予定である。また大学によっては、「CIEE Japan」の海外ボランティアプログラムへの学生の派遣を管轄していた国際交流センターや国際教育推進室などで、派遣するプロジェクトを指定した上、数名から 25 名の学生を対象に、3 万円～30 万円の奨学金を支給して、プロジェクト参加を促す学校もあった。本学では、このような奨学金給付のサポートもまだ行なっていない。メンバー校制度は、参加学生全員の参加費負担の軽減につながり、より平等である。一方、奨学金給付は基準の作成などが必要であり、特定のプログラムや学生が対象となる。いずれにしても、メンバー校制度や奨学金給付は、学生の海外ボランティアの参加率や「海外ボランティア」科目履修登録の動機を高める要因になり、今後の科目の発展において重要な要素の一つになると考える。

3　「海外ボランティア」科目のこれからのために

3.1　学生の「ボランティア活動」に関する実態・意識調査

3.1.1　調査目的

2016 年度「海外ボランティア」科目新設準備、2017 年度海外ボランティア派遣開始、2020 年度から 2022 年度夏までのコロナ禍による派遣中止を経て、2022 年度春プログラムから派遣再開となった。2017 年度から 2022 年度春にかけて、本学で把握している範囲では、62 名の学生が、本学と提携する「CIEE Japan」、「NICE」、「ICYE ジャパン」の海外ボランティアプログ

ラムに参加している。そのうち「海外ボランティア」科目履修登録、課題遂行、単位取得をした学生は、10 名であった。

今後さらに本学の学生が海外ボランティアとして世界に貢献し、学びを広げ深めていくには、そして「海外ボランティア」科目が発展していくには、どのような取り組みが必要であり、可能であるか。考えるヒントを得るため、本学学生を対象にボランティア活動に関する実態・意識調査を行った。その結果を以下に報告する。

3.1.2　調査方法

2023 年度後期 講義（選択）科目「国際理解 C（国際理解 II）（後）」の履修者（2 年生以上）を対象に、Office 365 Forms『ボランティア活動についての調査』を実施し、35 名（4 年生 3 名、3 年生 14 名、2 年生 18 名）が回答した。

3.1.3　調査結果

3.1.3.1 これまでのボランティア経験の実態と感想

まずこれまでのボランティア経験について尋ねたところ、11 名（31%）が「ある」と回答しており、そのすべてが日本における活動の経験で、国際理解に興味のある学生でも、海外ボランティアの経験がまだないことがわかった。

参加時期については、特定のピーク時期はなく、「小学生」から「大学 3 年生春」までのさまざまな段階に、回答が分散していた。また、回答総数が 31 であったことから、ボランティア経験を複数回もつ学生がいることもわかった。費用が必要ない活動に参加した学生がほとんどであったが、2 名は 1 万円未満の費用を負担して参加した。

活動内容についての回答も幅広く、「社会福祉」5 名、「その他」4 名、「文化交流」、「チャイルドケア」、「環境保護」がそれぞれ 2 名、「衣食住支援」、「被災地での支援活動」、「教育」、「動物保護」、「施設等の修繕・保全」がそれぞれ 1 名であった。「その他」について詳細が知りたくなった。

活動先を選択した理由やきっかけについては、「部活動の一環」2 名、「知人・友人の誘い」2 名、「親との相談」2 名、「市・近隣地域の活動」2 名、「授業の一環」1 名、「大学生が中心」1 名、「野良猫を保護したが、自分では世話ができず、代わりに行った保護活動」1 名であった。属する集団の活動の一部であったり、身近な人や地域との関わりが参加理由となっていることが判明した。また主体的に動ける環境や自分のニーズにあった活動内容を検討して参加している場合も見られた。

「海外ボランティア」の場合は、普段属している集団、地域、家族から飛び出し、自ら社会のニーズや問題に関わる数ある活動の中から、自分の力を使い、伸ばせるプログラムを積極的に選んでいくことが、参加の第一歩として必要となるだろう。学生にとってその部分の経験がない、もしくは難しい場合、大学が「海外ボランティア」科目において学外機関と提携し、さまざまな機会を紹介・提供することが、橋渡しとして重要であると考える。

また、活動選択において大切な要素としては、「活動内容」、「団体の信頼性」が 3 名で最も多

く、「活動場所への興味」、「安全性」が 2 名、「期間」が 1 名であった。

活動して良かったかを 5 段階で表すと、「4（良かった）」が 6 名、「5（とても良かった）」が 4 名、「3（どちらでもない）」が 1 名であった。良いと考えた理由は、「学びや成長」5 名、「貢献の実感や喜び」3 名、「体を動かす」、「楽しい良い経験」などがあり、どちらでもないと考えた理由は「イベントの主催者の中で情報共有がなく困った」からであると判明した。

3.1.3.2 今後のボランティア参加について意見

今後ボランティア活動をしたいと思うかという設問に対する回答は、「はい」が 28 名、「いいえ」が 7 名であった。

「いいえ」と回答した理由については、「特にない」、「大変そう」、「向いていない」、「どのようなボランティアがあるか自体をあまり知らない」などがあった。また、「これまで（内申点・進学などで）やりたいというよりもやらされているようなことが多かったので見返りがあるのが当たり前になってしまった」、「したいと思わないとは言わない。できる人を尊敬する。主体的に動かないかもしれないが、自分の行動を通して、活動する人の助けになれればと思う」といった、ボランティアに対する自分の意識が構築された背景や、特にボランティア活動に参加しなくても、日常の行動を通して間接的に貢献する意思について述べる回答があり、興味深い。

「はい」と回答した人の活動場所の希望については、「日本」23 名、「アメリカ」7 名、「インドネシア」5 名、「ベトナム」、「タイ」それぞれ 4 名、「中国」、「カンボジア」、「インド」2 名であった。「その他」は 0 名であったため、選択肢にあった国から選択していることがわかる。

希望する活動時期としては、「大学 3 年生夏」、「大学 3 年生春」がそれぞれ 9 名で最も多く、次いで「大学 4 年生春」7 名、「大学 4 年生夏」、「大学 2 年生夏」それぞれ 6 名、「大学 2 年生春」、「卒業後」それぞれ 5 名、「休学中（ギャップイヤー）」2 名、「大学 1 年生夏」「大学 1 年生春」、「在学中長期」それぞれ 1 名であった。「大学 4 年生春」、「大学 4 年生夏」、「卒業後」という回答も多く、就職・進学に有利に働くと考えてボランティア活動をするというよりも、むしろ進路が決まった後、次のステップまでに社会貢献の経験をしておく、またはその後の人生においてボランティア活動に従事すると考える学生が多いのかもしれない。

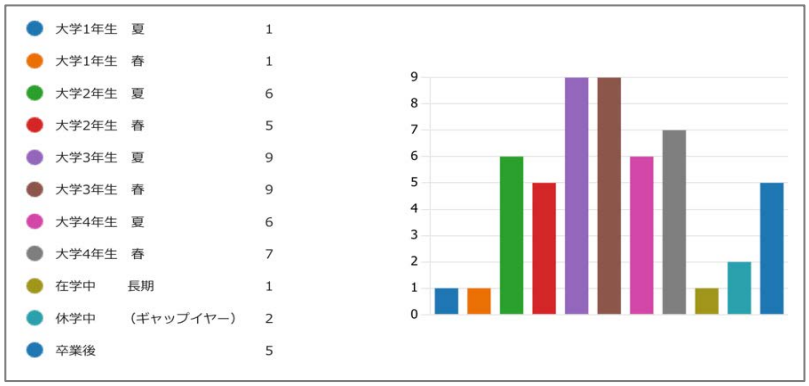

図 1 希望するボランティア活動時期

活動期間については、図 2 のように、「2～7 日」17 名、「1 日」7 名、「8～14 日」3 名、「22～28 日」1 名であった。本学の科目「海外ボランティア I」は、120 時間（4 週間程度)、「海外ボランティア II」は、60 時間（2 週間程度）の活動が必要となっているが、学生にとっては 1 週間から 2 週間が良いことがわかる。

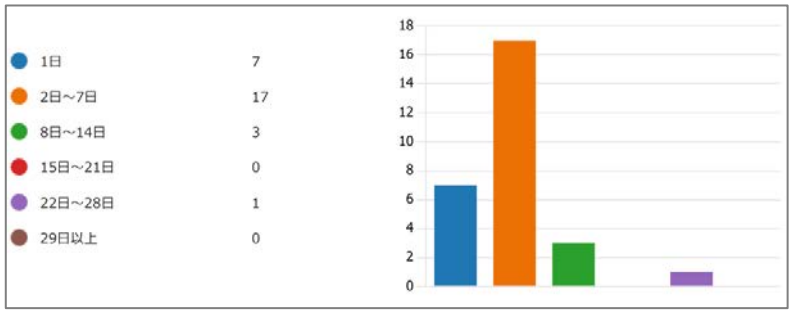

図 2 希望するボランティア活動期間

現在「海外ボランティア」プログラムの説明会においては、「海外ボランティア I・II」の単位取得につながるプログラムを中心に案内しているが、単位取得に繋がらなくても、学生の「海外ボランティア」への参加全般を促すのであれば、1 週間から 2 週間のプログラムを積極的に紹介することも良いのかもしれない。そのような学生の「海外ボランティア」参加を、本学の「学業成績ではわかりにくい努力や挑戦を評価する「KONAN サーティフィケイト」」の一つである、「KONAN グローバルサーティフィケイト」につなげ、世界貢献活動として奨励したい。

参加費用の希望についての回答は、「費用なし」11 名、「1 万円～10 万年未満」9 名、「～1 万円未満」5 名、「10 万円～20 万円未満」2 名、「20 万円～30 万円未満」1 名であった。「海外ボランティア」科目で提携している「ICYE ジャパン」の 2022 年度春インドネシアプログラムに 3 週間参加した場合、費用が 25 万円程度であったという報告があるが、実際にかかる費用は、学生がボランティア参加費として想定する費用よりもかなり高くなっているのかもしれない。学生も「海外ボランティア」の一般的な参加費について、各自がさまざまな機関の情報を収集する必要があるだろう。一方で、2.3「海外ボランティア」科目の状況で見たように、奨学金を支給したり、メンバー校制度に加盟して、プロジェクト参加を促す大学もあることから、大学としても、このような制度を導入可能か考えてみる必要があるかもしれない。

希望活動内容は、図 3 が示すように、「被災地での支援活動」が 13 名で最も多く、「文化交流」、「環境保護」それぞれ 10 名、「衣食住支援」、「日本語指導」それぞれ 8 名、「教育」7 名、「動物保護」、「社会福祉」それぞれ 6 名、「チャイルドケア」、「施設等の修繕・保全」それぞれ 2 名となった。災害、環境・動物系、教育系への関心の高さが窺える。以前「CIEE Japan」では、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの「環境保護」、「動物保護」、「社会福祉」、「チャイルドケア」プログラムがあり、やはり本学からの参加者が一定数いた。今後「ICYE ジャパン」や他の機関でこのような内容の活動があれば紹介したい。

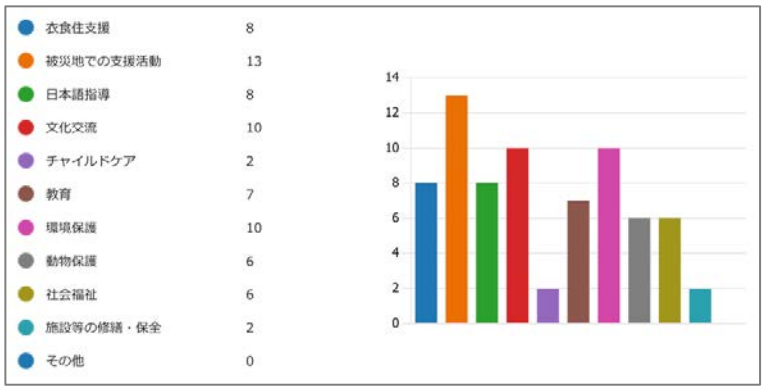

図 3 希望するボランティア活動内容

3.1.3.1 これまでのボランティア経験の実態と感想で見たように、ボランティア経験のある学生は、「部活動の一環」、「知人・友人の誘い」、「親との相談」、「市・近隣地域の活動」、「授業の一環」などの関係から、ボランティア活動を決定したと回答していた。では、今後ボランティアに参加する場合、活動先を決定するにあたり学生にとって最重要となる要因は何であろうか。

図 4 にあるように、「活動内容」が最も重要で、次に「活動場所への興味」と「費用」であることがわかる。また、「安全性」や「団体の信頼性」も重視していることがわかる。一方、「期間」、「単位取得につながるか」と回答した学生はいなかった。「海外ボランティア」科目を新設したが、「海外ボランティア」への参加が必ずしも成績評価や単位取得に繋がらなくても良いということであろう。今後「海外ボランティア」学内説明会を実施する際、単位申請手続き、課題提出、成績評価などの「単位取得」を目指す学生向けの情報だけでなく、「活動内容」、「活動場所」、「費用」などの、学生にとって重要な情報について丁寧に説明を行うと良いことがわかった。

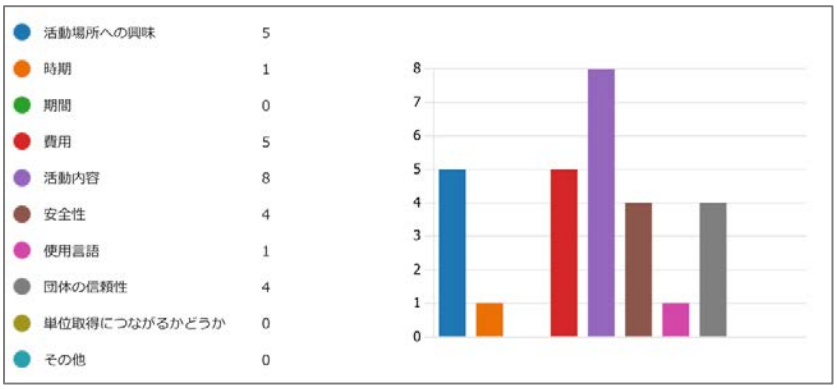

図 4 活動先を決定する際に一番大切なこと

では、単位取得は全く重要ではないのであろうか。上記の質問は、「活動先を決定する際、一番大事なことは何ですか」と尋ねているので、最優先事項を回答したため、回答者が 0 名であった、「期間」と「単位取得につながるか」が全く重要でないとは限らない。現に、「日報・レポート・プレゼンテーションという課題を行い、単位取得を希望しますか」という次の質問に

対しては、28 名のうち 14 名が「はい」、同じく 14 名が「いいえ」と回答している。

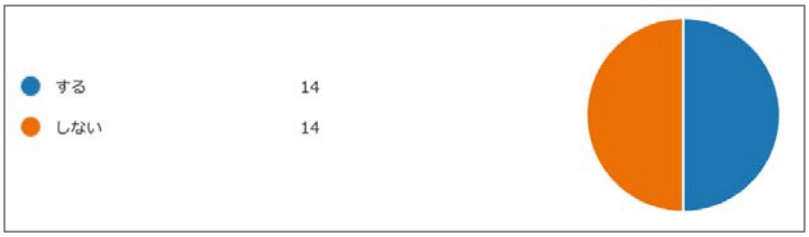

図 5 日報・レポート・プレゼンテーションという課題を行い単位取得を希望するか

「はい」の回答の理由を見てみる。「目標・目的になる」3 名、「単位も出たら尚良い」3 名、「活動して単位がもらえたら報酬になり win-win だ」2 名、「大学卒業に単位取得は重要」1 名、「課題を行うことで理解が深まり、他者にも周知できる」1 名、「テストで測れないものがある」1 名、「自分の良い記録・記憶となる」1 名、「プレゼンテーション能力の向上になる」1 名、「単位取得者が増える」1 名という回答が見られた。

「いいえ」の回答の理由を見てみる。「ボランティアで単位取得までは考えていない」2 名、「あくまで予定や希望で、行動に移せていない」2 名、「書くこと・プレゼンが苦手」2 名、「(単位取得について) あまり興味がない」2 名、「特になし、よく知らない」2 名、「今年度で卒業予定」1 名、「大学の一環でとは思わない」1 名、「ボランティアに対して必ずしなければならないと思うことが苦手」1 名、「苦手」1 名という理由が見られた。「大学での活動とは考えていない」、「単位取得に対する興味や知識がない」、「いろいろなことにおける苦手 (意識)」といった理由が根底にあるようだ。

最後に、ボランティア活動への参加を決意・検討するにあたり、情報量は適切であると感じるかという問いに関しては、「5 (とてもそう思う) 」「1 (まったくそう思わない)」の5段階で、平均「3.60」という結果となったことから、学生にある程度は情報が届いていることがわかったが、さらなる情報の周知を目指す余地があることが判明した。

4　まとめ

世界大戦の経験から、ヨーロッパ諸国を中心に相互理解を通して更なる戦争を回避する目的で国際交流が盛んになり、国境を越えて荒廃した地域を復興する国際協力も活発に行われてきたが、その中心は若者である。そのような活動のニーズが、現在世界各地にも広がっている。

本学「海外ボランティア」科目も、「いろいろな人々との交流や地域へ貢献できるボランティア活動を実施する」という目的で開設された。その実現にむけ、科目新設・運営において、どのように外部団体と連携・協力してきたか、振り返ってまとめた。さらに実際の学生の海外ボランティアへの参加状況と、「海外ボランティア」科目の履修状況を調査した。その結果、連携する団体の海外プログラムにおいては、自立性の高いプログラムにも予想より多くの学生

が参加していることがわかった。単位認定を求めて科目履修した学生は、参加者全体の約16%であった。大学のサポートや単位制度から独立して活動する学生も多い現状である。

単位認定についてどのように考えているか、「国際理解 C」の科目履修者に調査をおこなったところ、単位認定を望む学生と特に望まない学生の回答が同数となり意見が分かれた。望む学生は、課題を遂行して単位を取得するプロセスで、目的・目標が明確になり、活動を通して得た学びを深め、プレゼンテーションなどの技術を磨き、他者に伝える機会にもなると考えていることがわかった。希望していない学生は、「大学での活動とは考えていない」、「単位取得に対する興味や知識がない」、「いろいろなことが苦手だ」といった考えを持っていた。

実際に「海外ボランティア」科目を履修し、単位を取得した学生はどうかというと、多様な価値観への適応、現地の社会問題、自分のいる環境の特徴、他者との関わり方などについて学んだと報告している。また自らの学びの内容や海外ボランティアの意義について、学内で他の学生にも周知したいという意見もあった。

United Nations Volunteers Programme (2021)によれば、厳密な調査は難しいが、パンデミックによりボランティアは増加しており、1ヶ月あたりのボランティア率は、15才以上の労働人口の15%で、8億6200万人となっており、複数の活動に従事する人々もいる。また、世界のボランティア参加者の14.3%は個人間で行われる非公式な活動、労働年齢人口の6.5%は機関・協会を介した公式な活動である。今回のボランティア経験に関する学生調査でも、知り合いの依頼など、非公式と思われる活動も見られた。本学において、そういった活動の完全な把握や評価は難しいと考えるが、それでも学生個人が海外でまとまった社会貢献活動を行った場合、「KONANグローバルサーティフィケイト」などの制度において認証を得ることができたら、今後の活動の継続にもつながると考える。また、卒業後にボランティア活動を行いたいという声もあるため、労働しながら何らかのボランティア活動に参加できる知識と意欲を醸成できる他科目との連携や、新カリキュラムがあると良いであろう。

さらに、国際協力の分野においては、「国際協力師」と呼ばれる、国際機関職員、政府機関職員、民間組織の有給職員、開発コンサルタント会社職員、社会的企業社員、一般企業のCSR(企業の社会的責任)担当者といった職業とは別に、「国際ボランティア実務士」という資格もある（山本, 2020）。「国際協力師」、「国際ボランティア実務士」といった職業や資格を目指す学生のサポートになるような科目内支援や新たなカリキュラムについても、考えていきたい。

謝辞

「海外ボランティア」科目新設を提案・リードいただきました津田信男名誉教授、新設準備段階から開設当初にかけて多方面から支援をいただきました「CIEE Japan」と「ETS Japan 合同会社」の皆様、2022 年度より提携させていただいている「ICYE ジャパン」の皆様、同じくご協力をいただいています「NICE」の皆様、科目を所管する全学教育推進機構事務室の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

山本敏晴（2020）『「国際協力」をやってみませんか？仕事として、ボランティアで、普段の生活でも』小学館.

山形辰史 (2006)「故国を去るには理由がある」（アジア経済研究所　調査研究　国際人口移動）
<https://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Theme/Soc/Migration/200608_yamagata.html>
（最終アクセス：2024年1月4日）

一般社団法人 CIEE国際教育交換協議会（2019）『CIEE 海外ボランティア報告書　2018年4月～2019年3月』

CIEE 「Read about our CIEE community near and far」「More from CIEE around the world」
<https://www.ciee.org/about/what-we-do/around-world>
（最終アクセス：2024年1月4日）

ICYE Japan 「ICYEジャパンとは」
＜https://www.icye-japan.com/about/#icyefed＞
（最終アクセス：2024年1月4日）

NICE 「国際NGO NICEについて」
＜https://www.nice1.gr.jp/about/＞
（最終アクセス：2023年12月14日）

United Nations Information Centre. (2020). 2020年、「行動の10年」スタートガイドライン（日）
<https://www.unic.or.jp/files/201106_Decade_of_Action_logo_GuidelinesJ_v.1.pdf>
（最終アクセス：2023年12月14日）

United Nations Volunteers (UNV)Programme. (2021). 2022 State of the World's Volunteerism Report: Building Equal and Inclusive Societies.
＜https://swvr2022.unv.org/chapter-2/＞
（最終アクセス：2023年12月14日）

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』国際教育交換協議会
＜https://ja.wikipedia.org/wiki/国際教育交換協議会＞
（最終アクセス：2023年12月14日）